

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00346

研究課題名（和文）日本占領地における中国知識人の「抵抗」と「協力」の交錯 女性作家・梅娘を中心に

研究課題名（英文）The Intersection of Resistance and Collaboration of Chinese Intellectuals in the Japanese Occupied Territories: With a Focus on the Female Writer Mei Niang

研究代表者

羽田 朝子（HANEDA, Asako）

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：90581306

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本占領下の北京を代表する女性作家・梅娘に着目し、その言論や文学に表出された近代性と民族主義の相克について検討し、以下の点を明らかにした。

梅娘が活動の拠点としていた文芸雑誌は、日本の文化政策に沿いつつも、近代性の導入を目指すとともに、中国人作家の主体的な活動の場を守ろうとしていた。こうした背景のもと、梅娘はその言論において日本をモデルにした女性の近代化や権利拡張を主張し、文学作品において日本の支配に対する批判や中国知識人の葛藤といったテーマを描いた。ここからは彼女が民族的な危機にさらされながらも、中国知識人として近代化に取組み、その主体性や文化の場を守り抜こうとした姿が窺える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国の日本占領地の文学研究においては、中国人作家の親日的な言論や行動に対して民族意識の欠如を指摘するにとどまり、深い考察がなされてこなかった。本研究はこの研究の空白を埋め、占領地における中国知識人の行動や精神は、民族主義という枠組みだけでは説明しきれない、複数の要因が絡み合った複雑性と矛盾性を持つものであることを明らかにした。

台湾や朝鮮といった日本植民地の文学研究では、すでに親日作家の「抵抗」と「協力」の交錯について解明されつつある。本研究により中国・台湾・朝鮮の三地域の相互比較が可能となったのであり、中国文学分野にとどまらず日本植民地文学の発展にも大きく貢献したといえる。

研究成果の概要（英文）： This study focuses on Mei Niang, a representative female writer in the Beijing literary world under the Japanese occupation. It examines the “conflict between modernity and nationalism” expressed in her discourse and literature, identifying the following points.

The literary magazines in which Mei Niang based her activities followed Japanese cultural policy and aimed to introduce modernity, while at the same time protecting the space for independent activities by Chinese writers. Against this background, Mei Niang argued for women’s modernization and rights, depicting themes such as criticism of the Japanese occupation and the conflicts of Chinese intellectuals. In her works, Mei Niang put forward a modern view of women and children modelled on Japan; this view was carried over into her post-war activities in the People’s Republic of China.

研究分野：中国文学

キーワード：満洲国 梅娘 日本占領地

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 先行研究について

日本占領地で活動した中国人作家については、日中両国の研究界では戦後「漢奸（売国奴）」と見なされ、その文学は長らく顧みられることはなかった。1980年代にアメリカの研究者 Edward M. Gunn（耿徳華）が占領地の文学を中国現代文学の一領域として大きくとりあげたことをきっかけに、日本占領地の文学の捉え直しが始まった。こうした近年の再評価のなかで、とりわけ注目されているのが日本占領下の北京で活躍した満洲国出身の女性作家・梅娘（1916～2013）である。

梅娘に関する代表的な研究として、張泉『抗戦時期的華北文学』（貴州教育出版社、2005年）や陳言『忽值山河改：戦時下的文化触変与異質文化中間人的見証叙事（1931～1945）』（中央編訳出版社、2016年）がある。これらは梅娘が満洲国から日本滞在を経て日本占領下の北京に移った後、その文学が大きく飛躍し、日本の帝国主義や植民地支配、あるいは女性を抑圧する男性中心社会に対する批判を描きだしたとして高く評価している。その一方で、梅娘が満洲国よりも言論統制が緩やかであった北京において日本の文化政策に深く関わり、親日的な言論を発表したことに対しては、梅娘の民族意識の欠如を批判するにとどまり、それ以上深く検討することはなかった。

そのため梅娘の「抵抗」と「協力」が交錯する精神については、その詳細が解明されてこなかった。こうした交錯する精神は、梅娘に限らず当時の北京で活動していた中国知識人にも共通するものであり、日本占領地の文学研究における大きな謎となっていた。

#### (2) 本研究の着眼点

これに対し、本研究は占領地における中国知識人の行動や精神は、民族主義や帝国主義という枠組みだけでは説明しきれない、複数の要因が絡み合った複雑性と矛盾性を持つものであったと仮定した。そしてこれを解明するために、以下の三点に着目する必要があると考えた。

まず一つ目は、占領地の中国知識人が直面していた近代性と民族主義の相克である。梅娘に限らず、近代以降の中国知識人は日本に「侵略者」としての側面のほか「近代化の手本」としての一面を見出ししていた。とくに日本占領地では日本の近代性が、中国知識人の民族主義との間で葛藤を生みだし、その精神により複雑な矛盾を与えていたと考えられる。

二つ目は、公共圏の形成である。梅娘を含む占領地の中国人作家は日本の影響下にある雑誌に集まり、独自のコミュニティを形成していたが、これは彼らが日本の近代性を目の当たりにして危機感を強め、自らを中心とする公共圏を形成して主体性を確保しようとしていたと考えられる。梅娘の文学や言論を考える上では、その背景となった公共圏について明らかにする必要がある。

三つ目は、戦後の作品における連続性である。従来の研究では占領地の作家の戦後の活動まで視野に入れることが少なく、戦前と戦後で研究が分断されてきた。これに対し、梅娘の作品には戦前・戦後でテーマの連続性が見られ、これを明らかにすることで彼女にとって必ずしも民族主義だけが最大の関心事ではなかったことが証明できる可能性が高いのである。

### 2. 研究の目的

本研究は日本占領下北京で活動した梅娘の「抵抗」と「協力」が交錯する精神について、近代性と民族主義との相克、公共圏の形成、戦後の作品における連続性に着目し、解明することを目的とした。これにより、従来の民族主義や帝国主義の枠組みでは解明できなかった占領地の中国知識人の複雑で矛盾に満ちた精神を明らかにし、ポストコロニアルの視点から日本占領地の文学を捉えなおすことを目指した。

具体的には、日本占領下北京における梅娘の活動の拠点であった文芸雑誌に着目し、各誌上で形成された公共圏の様相について検討した。その上でこれらの公共圏で発表された梅娘の言論や文学を分析し、そこに表出された近代性と民族主義の相克に着目して読み解いた。そして、中華人民共和国期の1950年代における梅娘作品を取り上げ、戦前・戦後のテーマの連続性について考察した。

### 3. 研究の方法

研究の方法としては、大きく以下の二つに分れている。

一つ目は、日本占領下北京における梅娘の活動の拠点となった雑誌『婦女雑誌』（1940年9月～1945年7月）、『中国文学』（1944年1月～11月）、『華文大阪毎日』（1938年11月1日～1945年5月）の基礎調査を行い、各誌上で形成された公共圏について検討した。『婦女雑誌』と『中国文学』は日系の武徳報社の傘下におかれ、『華文大阪毎日』は日本の大阪毎日新聞社・東京日日新聞社によって発行されており、いずれも日本の文化政策の影響を色濃く受けていたことから、先行研究では注目されてこなかった。これに対し本研究では、これらの誌上では同時に日本の近代性の導入や中国知識人の主体性の確保が叫ばれていたことに着目し、分析を行った。

その上で、各誌上で発表された梅娘の女性論、長編小説「小婦人」や「蟹」について取り上げ、

それぞれの公共圏における意味や位置づけを踏まえながら、そこに表出された近代性と民族主義の相克に着目して読み解いた。

二つ目は、中華人民共和国成立後の1950年代において梅娘の主な文学活動の場となった上海の『新民報』晩刊、香港の『大公報』での発表作品を読解し、戦前の日本占領下における作品とのテーマの連続性や断続性について検討した。

#### 4. 研究成果

本研究では、日本占領下の北京を代表する女性作家・梅娘に着目し、その言論や文学に表出された近代性と民族主義の相克について検討し、以下の点を明らかにした。

梅娘が活動の拠点としていた雑誌『婦女雑誌』、『中国文学』、『華文大阪毎日』は、占領当局の文化政策に沿ったものであったが、近代性の導入を目指すとともに、中国人作家の主体的な活動の場を守ろうとしていた。こうした公共圏が形成されるなか、梅娘は女性の近代化や権利拡張を主張し、日本の支配に対する批判や中国知識人の葛藤といったテーマを描いた。そのなかで梅娘は日本をモデルにした近代的な女性観や子ども観を打ち出しており、それは戦後の中華人民共和国での活動においても引き継がれた。

こうした梅娘の活動からは、日本占領下という困難な状況の中で、民族的・政治的な危機にさらされながらも、近代化という当時の知識人共通の課題に取り組み、中国知識人としての主体性や文化の場を守り抜こうとした姿を見いだすことができる。

以下、詳細を述べる。

##### (1) 『婦女雑誌』の公共圏と梅娘の女性論

女性雑誌『婦女雑誌』は日本の文化政策の影響を受けながらも、女性の社会進出や教育の普及といった女権拡張を大きな目的としていた。そして全体を通じて日本女性を近代女性の模範として盛んに紹介しており、とくに近代的主婦像に関心が集まっていた。その後、戦局が深まると日本の銃後の女性像も紹介されるようになるが、それは近代的主婦像と表裏一体のものとして捉えられていた。つまり『婦女雑誌』は日本占領下にあって中国女性の近代化（国民化）を目指しており、そのなかで主婦像と銃後の女性像という二つの要素は、近代女性像に並存する表裏一体のものとして捉えられており、日本女性はその近代女性像のモデルとして見なされていたのである。

梅娘は『婦女雑誌』において女子教育の普及や女性の社会進出を主張する言説とともに、日本の主婦像や戦争協力する銃後の日本女性を評価する随筆「為日本婦女祝福」（1945年6月）を掲載した。先行研究ではこうした梅娘の言説に対し民族意識の欠如を指摘していたが、その言説は『婦女雑誌』の中国女性の近代化（国民化）を目指す言説の延長上にあつたのである。ただし梅娘は日本女性の近代性については肯定しつつも、政治的には日本と一定の距離を保っていた。梅娘の『婦女雑誌』にみえる女性論は、日本占領下という政治的・民族的危機に満ちた時空において、女性の近代化という当時の知識人共通の課題に取り組みようとするなかで形成されたものであったといえる。

##### (2) 『中国文学』の公共圏と梅娘「小婦人」

文藝雑誌『中国文学』には満洲国から占領下北京に移ってきた若手の新進作家が多く集まっており、梅娘の夫である柳龍光のほか、陳魯風、梁山丁、袁犀らが文学評論を数々掲載していた。柳龍光と陳魯風は占領当局の文化政策の影響を色濃く受けた「国民文学」を提唱し、一方で梁山丁や袁犀は政治性をもつスローガンから距離をとっていた。ただし彼らはいずれも華北文壇の文学の荒廃に対し危機感を抱き、文学理論あるいは創作で積極的に声をあげ、中国新文学の発展を目指していた。その論説からは日本に接近しながらも中国人作家の主体性を守ろうとする主張が見出せる。

こうした『中国文学』の言論空間を踏まえ、誌上に連載された梅娘「小婦人」（1944年1月～11月）を解読してみると、男性主人公の袁良を通じて、占領下の中国知識人の複雑な心理が描かれていることが分かる。袁良の「彷徨する大衆」を導くという理想とその挫折、日本の植民地主義の熱狂やエゴイズム、それに対する違和感、沈黙するしかない無力感、『中国文学』同人たちが占領下の活動のなかで経験したものといえる。結末において袁良が最後に中国人としての自尊心を取り戻し、日本で再生を決意する姿には、『中国文学』同人たちが占領当局の文化政策に取りこまれる危険を冒しながらも、積極的に声を発し、中国知識人としての主体性や文化の場を守り抜こうとする果敢な精神が反映されている。

##### (3) 『華文大阪毎日』の公共圏と梅娘「蟹」

雑誌『華文大阪毎日』は日本の国策宣伝を趣旨としていたものの、文藝欄に力を入れており、既成作家の流出によって文壇が荒廃していた日本占領下の中国人作家に安定した作品発表の場を与えた。梅娘の代表作「蟹」はこの『華毎』に掲載された（1941年9月1日～12月15日）。

「蟹」連載当時、『華文大阪毎日』編集部は誌上において「南北文壇の融合」や「女性作家の創出」を目指しており、関連する数々の特集を展開していた。こうした背景のもと、「蟹」は上海のベテラン作家張資平の長編小説「新紅A字」と同時期に連載された。編集部はこの南の男性老

作家（張資平）と北の新進女性作家（梅娘）の同時連載について相当な力を入れており、誌上において大々的に宣伝した。とくに当時張資平は汪精衛政権の官僚となり、さらに不倫スキャンダルを起こしており、その二重のスキャンダルは世間の話題を集めていた。この張資平の作品と同時連載されたことにより、「蟹」も相当な注目がされたものと予想される。

張資平と梅娘の作品は、いずれも占領下や植民地の社会について意識的に描いており、またヒロインを中心に展開する点でも共通していた。ただし、このヒロインの表象は主体性の有無という点で大きく異なっており、これがヒロインの植民地主義に対する向き合い方にも大きく影響していた。同時連載されたことにより、この対照がより鮮明となり、当時あって共感しやすい視点をとった「蟹」は、大きく注目されたものと考えられる。

そして梅娘は「蟹」により植民地としての満洲国について描き、自己や歴史と深く向き合うことになった。周縁に立ったヒロインの視点、大家族の抑圧や植民地支配への批判、自らにも批判の眼を向ける内省性といった要素は、梅娘の他作品でも断片的にみられるが、長編小説の「蟹」ではそれらを融合して表現することが可能であったのである。

#### (4) 女性観における戦前・戦後の連続性

(1) で明らかにした通り、梅娘は日本占領下の北京での活動のなかで近代主婦像——とくに母性を重視する女性観を形成し、それを支持する言説を数多く発表していた。梅娘は1950年代に上海の『新民報』晩刊、香港の『大公報』で多数の随筆を発表しているが、これらの作品においても、共通した女性観が反映されている。これらの作品からは、梅娘の合理的な生活感覚や家庭の日常生活を愛する繊細な感受性、子どもへの溢れる愛情や強い母性を読み取ることができる。なかでも子どもの教育、とくに情操教育をモチーフにしたものが多く含まれており、これに関する梅娘の関心の高さが窺える。このことから、戦前に梅娘が形成した女性観が戦後の作品にも引き継がれたことがわかる。

こうした連続性に着目した結果、戦前・戦後における大きな違いとして浮かび上がってくるのは、作品に表出している梅娘の現前の国家や社会への態度である。戦前の近代主婦像に関する言説において、梅娘は女性が社会や国家へ貢献しうる存在であるべきだとしていたものの、自らが身を置く日本占領下の社会については沈黙し、何も語らなかつた。しかし戦後の作品においては、社会主義体制下の国家や社会について積極的に語り、それに対する肯定的な立場を明らかにしている。おそらくは、日本占領下においては民族主義的な問題から忌避したものの、戦後においてはそれが解消したことから積極的に語ることを選択したのだと考えられる。

こうした戦前・戦後の梅娘の女性観をめぐる言論からは、日本占領下という困難な状況の中で、民族的・政治的な危機にさらされながらも、自らの民族にとって有益な近代性を摂取し、自らの社会や国家の前進を図ろうとした知識人の姿を見出すことができる。

#### (5) 童話創作における戦前・戦後の連続性

梅娘は1940年前後に日本に滞在した経験を持っており、阪神間という当時日本でも近代文化が進んだ地域に居住し、子どもらしさを尊重する児童教育のあり方に触れることになった。また当時の日本では大正期以来の童話ブームがピークに達しており、優れた童話作品が豊富に出版されていた。こうした背景のもとで梅娘は童話の読書経験を積み、その後日本占領下の北京に移った後、日本の中国童話集の翻案や童話創作を手がけた。それらの作品において独自の空想的なファンタジーの世界を展開させながら、自身の子ども観を反映させた。

梅娘は中華人民共和国成立後も童話創作を続けており、1950年代に上海の『新民報』晩刊、香港の『大公報』で複数の童話を発表している。これらの作品では現実の生活のなかでの子どもの姿をモチーフにしており、善良さや純粹無垢、努力といった美点を持つだけでなく、欠点も持っているものとして描かれ、周囲の大人の教導により欠点を克服し成長する姿が描写された。ここでは以前のような空想的なファンタジーの要素はなくなり、現実の生活や社会に根ざしたリアリズムを重視したものになっている。ただしその近代的な子ども観や、それに基づく童話創作は、形を変えながら戦後にも引き継がれたことが分かる。

#### (6) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

中国の日本占領地の文学研究においては、中国人作家の親日的な言論や行動に対して民族意識の欠如を指摘するにとどまり、それ以上深い考察がなされてこなかつた。本研究はこの空白を埋め、占領地における中国知識人の行動や精神は、民族主義という枠組みだけでは説明しきれない、複数の要因が絡み合った複雑性と矛盾性を持つものであることを明らかにした。また従来の研究では占領地の作家の戦後の活動まで視野に入れることが少なく、戦前と戦後で研究が分断されてきたが、本研究では戦後の作品にまで視野を広げ、戦前・戦後のテーマの連続性を見いだした。

本研究はこうした検討を通じて、日本占領下という困難な状況の中で、中国人作家が民族的・政治的な危機にさらされながらも、近代化という当時の知識人共通の課題に取り組み、中国知識人としての主体性や文化の場を守り抜こうとした姿を解明したのである。

台湾や朝鮮といった日本植民地の文学研究では、作家の親日的な言論や行動について、民族主義と近代性の相克に着目し、その複雑性と矛盾性が解明されつつある。本研究により中国・台湾・

朝鮮の三地域の相互比較が可能になったのであり、中国文学分野にとどまらず日本植民地文学の発展にも大きく貢献したといえる。

(7) 今後の展望

本研究は占領地の作家の戦後の活動にまで視野を広げたが、その対象は1950年代までに限られていた。本研究が対象とした梅娘は、その後文化大革命のなかで厳しい批判を受けたが、1990年代から文学活動を再開し、2013年に亡くなるまで多数の自伝的エッセイを発表している。今後は、梅娘の晩年の自伝文学に着目し、戦前では他民族の抑圧を、戦後の文革では同一民族から迫害を受けるという、二重の民族的抑圧を受けた彼女が、どのようなナショナル・アイデンティティを形成するに至ったのかを検討したいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 羽田 朝子	4. 巻 112
2. 論文標題 梅娘「蟹」と『華文大阪毎日』 張資平「新紅A字」との同時連載をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 野草	6. 最初と最後の頁 50 74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽田 朝子	4. 巻 49
2. 論文標題 梅娘の女性観にみえる戦前・戦後の連続性 近代主婦像の受容と展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽田朝子	4. 巻 92
2. 論文標題 『婦女雑誌』にみえる梅娘の女性観：近代的主婦像と「国民の母」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代中国	6. 最初と最後の頁 93-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽田朝子	4. 巻 102
2. 論文標題 但（女扁に弟）の描く「日本」 満洲国の女性作家と日本留学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 野草	6. 最初と最後の頁 85 105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 羽田 朝子
2. 発表標題 満洲国の女性作家・梅娘の日本経験 童話創作を中心に
3. 学会等名 秋田中国学会第174回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 羽田 朝子
2. 発表標題 梅娘「蟹」と『華文大阪毎日』
3. 学会等名 中国文芸研究会9月例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 羽田 朝子
2. 発表標題 梅娘対現代児童觀的接受及其童話創作
3. 学会等名 「台湾 / 満洲 / 朝鮮の植民主義と文化交渉」国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 羽田 朝子
2. 発表標題 從梅娘的女性觀來看“ 戦前和戦後の連續性 ”
3. 学会等名 「東亞殖民地主義與文學會議」年度大會（国際シンポジウム）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 羽田 朝子
2. 発表標題 梅娘の日本滞在期と外国文学紹介
3. 学会等名 秋田中国学会第171回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 羽田 朝子
2. 発表標題 梅娘「小婦人」における近代女性像とナショナル・アイデンティティ
3. 学会等名 日本中国学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 羽田朝子
2. 発表標題 『中国文学』の言論空間と梅娘「小婦人」
3. 学会等名 “伝播視域下の東亞植民主義研究” 国際学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 羽田朝子
2. 発表標題 『婦女雜誌』の言論空間と梅娘「為日本婦女祝福」
3. 学会等名 「台湾／満洲／朝鮮の植民主義與文化文化交渉」 国際学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------